



土 爭

1976 - 9

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一冊發行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 刊行料費定額第三五号
昭和五十一年八月二十五日印刷 昭和五十一年九月一日發行
第四十二卷 第九号



S. Kuo



鬼手佛

心

若水定學



鬼手仏心

井川 定 慶

(仏教大学教授・文博)

鬼手仏心という扁額を外科医のお宅で初めて拝見して
なるほど治療に際してメスを振るわれる手は鬼の如く無

慈悲な行動であるが、そのお医者さんの心の中には此の難病を取り除いて健康な身体にそして安穩な心の持ち主になってもらいたいばかりに、今はこういう激痛を与える手術を施すが、ほんとうに念願するところは仏心にも通ずる程の慈愛に充ち満ちた心の持ち主なのである。このように私なりに解釈して、しばし「何という名文句だナア」と感じ入って帰ったものである。

ところが帰宅して「鬼手」という文句を『広辞苑』で調べると、其れは「囲碁・将棋で相手を驚かすような奇抜な指し手」と説明されている。

対局する人にただ勝つとか負けるとかという相手だけでなく、新聞で棋譜を見られる人にも充分楽しんでもらいたいという慈愛心があつてこそ、真の名人とか王将と仰がれる人格になれるのではなからうか、と私なりに解釈して見たい。

現実の行動は粗節であっても真の目標は仏教の主眼を指して一步一步前進するという風に世に処して行きたいのが私の念願であつて、此の句の解釈は各人銘々御自由になされるが、近年頼まれるとよく此の句を書き与えている。先年私の弟に書き与えた処、それを偶々夫人の親戚の外科医の新築記念に扁額に表装して贈り、先方で大変喜んで掲揚しているという事を最近承っている。



九月号

目次

〈彼岸法話〉 かの岸の光……………	俵口隆成……………(2)
浄土訪問 徐景洙先生に聞く「韓国仏教閑話」……………	……………(5)
現代とこころのシリーズ⑧	
仏典童話ひとすじの道……………	花岡大学……………(10)
自治意識を育てるために……………	吉水現祐……………(17)
心の履歴書から……………	川内知光……………(19)
お経のページ 法句経……………	……………(23)
浄土教の流れⅧウラ・オモテナシ……………	竹中信常……………(24)
〈読者の声〉 お彼岸を迎える心……………	山本誠山……………(29)
法数術語十二ヵ月(九月の巻)……………	宝田正道……………(32)
日本仏教の宗派	
③ 南都六宗(三)俱舎宗・成実宗……………	……………(34)
念仏ひじり三國志(二十九) 法然をめぐる人々……………	寺内大吉……………(37)

表紙 久住 静雄画

カット 大正大学電術部

彼岸法話

かの岸の光



たわら ぐち りゅう じょう
俵口隆成

(京都市左京区専念寺住職)

私は戦後派ではありませんのでテレビの「大岡越前」を見るのが大好きです。マゲ物は現代にマッチしない面が多々あるのに何故この様にもてるのでしょうか、一時間のドラマに多分の山と川、苦と楽、悲と喜があるからであると思います。今も茶の間で加藤剛扮する「大岡越前」が端正な袴姿で妻の差出す白装束を下に着込んで出立する処である。

時の將軍吉宗に盾を突き事毎にかまえる尾州侯の屋敷に乗り込んだ越前は命がけの交渉を始める。尾州家の家来の刀をかまえる中の越前は一つ違えば腹を切らねばならないが声涙共に下る誠一すじの正論にさすが尾州の太守も矛を収める。あわやと思う場面とほっとする場面とこの二面の取合せによって妙を発揮するに至る。

これはテレビドラマであるからではない。世のあらゆる場合悉くこれと同様である。苦と楽、悲と喜があつて世は成り立っているのである。一年中悲しみばかりではない。一年中苦ばかりではない。といつて年中楽と喜ばかりでもない。苦と楽とが入れかわり立ちかわり去来して世は回転しているのである。彼岸というのも同様であつて彼岸だけではない

此岸があつて彼岸があるのである。

秋の彼岸が近づき肌に涼風が到来する頃となつて今はもう季節の言葉のみとなつて来ているがこの好季節にこそ本当に彼岸の心を味うべきである。彼岸は彼岸だけでなく此岸のあり方を知つて始めて彼岸の心を知る事が出来るのである。

此岸とは。今私達の生きている世間であります。永らく生きてまいりました世間のあり方は十分承知している筈でありますが如何でしょうか。此岸に生きているには違ひないが生き方が問題であります。二十四時間生きてはいるがまことに消極的で時間が過ぎればよいと考えている生き方もあります。何事も不十分でどうでもよい生れたついでに生きているという生き方もあります。たまたま少し積極的になれば人を押し除けても自分だけよければよいという生き方、人より多いはよいが少いはいけない取り込む一方で人と共に喜ぶという事は一切ないという生き方。こう生き方を総称して「生きぞこない」と申します。まことに妄念のままに生きるという事でこれが我々此岸に生きる凡夫の正体であります。

生きぞこないもやがて死にます。一体いつまで生きていますでしょうか。あと五十回正月を迎えられるという人は何人あるでしょうか。三十回の正月を迎える人もあるでしょうか。十回の正月どころか来年の正月も明日の朝さえもあるやらないやらわからないのが現実であります。も早や位牌の裏に彫り込む命日は今から決定して居るのでありますが、あまり早くから知らせると人はあわてますので知らせない事になつて居るのであります。

一たび最後の瞬間が訪れたならば此の世にある一切の物は役に立ちません。薬と云う薬、世界中には幾億種類の薬があるが一つとして命を救うものはない。高度な技術を誇る医術も彼に立たない。幾億円の金も一切役に立たず命を買いもどす事は出来ない。六親け

ん族只泣くばかりが三日も置かずに野辺送りをする。此の世とはこういう処である。一体どうしたらよいのであろうか。

このどうしたらよいのであろうかという最後の一像に輝くばかり仰ぎ見るのが御仏であります。無量の力と無量の光、無量という言葉があまりにさりげなくて我々は想像も出来ませんが、量り知れぬ無限の力と光があつて私達は始めて救われるのである。此岸はまことに頼るものとて一つない世界であるが、彼岸の往方には大いなる救いの御力があるのを感じずには居られない。此岸の在り方を究めれば無力の私の唯一のたよりは彼岸の御仏を仰ぐ事にたるのであり、今は唯仏のいわれる如く、口称の一行によつてこの偉大なる救いの御力を待つべきである。

称うればここに居ながら極楽の

聖象の数に入るぞうれしき

此岸に在つて彼岸を望む我々ではあるが、直ちに以て彼岸に渡れるものではない。相変らず今日も明日も此岸の暮しであります。死ぬまで此岸の生活であります。しかも日夜迷倒凡愚の明け暮れであります。如何にせばこの此岸迷倒の凡愚が御仏の御力をいただく事が出来るであらうか。

八百年の昔、祈るとても願うとても出来ぬ土壇場の人に「口に称えよ」、「声に出せ」と教えられたのが法然上人であります。

春秋二回、声うち立ててさわやかに「南無阿弥陀仏」と称えて、此処に（此岸）に居ながら極楽（彼岸）の聖衆の中に肩をならべさせていただく喜をかみしめる好季節を迎えるのが彼岸の心であり、これを到彼岸というのであります。



(浄)
(土)
(訪)
(問)

——韓国・東国大学教授——

徐景洙先生に聞く
じょけいしゅう

韓国仏教閑話

——つい先頃まで「韓国美術五千年展」と銘打たれた博物館展覧会が盛大に催されていました。韓国の有名な慶州博物館所蔵のものやその他の興味尽きない文物が、余すところなく展覧されていました。世にいう歴史ブーム、考古ブームを越えて、わが日本の原風景を求めての関心からか、観覧者の数も大変多かったようで、催しはまことに盛大裡に終えたということでした。

朝鮮半島の文化。今日では北朝鮮が共産圏ということで、なかなか交流がむずかしいわけですが、韓国は、日本のまったくのお隣りの国。韓国への旅行

者も多く、交流はきわめて盛んなわけです。ことにその歴史的交渉史からみても、日韓関係ははなはだ重要なわけですが、さて仏教文化という視点から考えてみても、韓国仏教の考察はこれまた重要な意味合いを含んでいるわけです。

そういうことから、本日は韓国・東国大学教授の徐景洙先生の来日中の貴重なお時間を拝借して、浄土訪問の欄のお相手になっていただきまして、色々とお話しを伺いたいわけです。東国大学は首都ソウル（京城）にある仏教系の大学で、先生は「仏教哲学」や「比較宗教学」などの講座を担当されておら

れます。

——さて本日はご多忙のスケジュールをさいていただきましてまことに申し訳ございません。これから、韓国仏教の歴史と現況というようなことから、最近のわが国における韓国ブームなどということを踏まえまして、韓国の文化と風土というきわめて大雑把な内容をお気軽にお話し願いたいわけですが。

余り日本語が自由でありませんので、お聞き苦しいかもしれませんが、こちらこそ宜しく願いますね。

——ところで先生は日本へお出でになられて、今度で何回目でございますか。

五回目の訪日というところですか。最初は一九六八年で、もう八年も前のことです。

——最初に日本にいらしたことの印象と、八年後の今日とではいかがでございますか。

非常に産業文化の現代化がめざましいということですね。しかし何といいまか、産業経済のスピードに対して、精神的な文化というか宗教というか、そういう方面の速度が遅いように思われます。もちろん、これは日本ばかりのことではなく、世界的な現象でしょうし、遅ま

きながら、わが国（韓国にあっても）でもまったく同じです。

——さて、ここで戸籍調べのようですが、先生のご専門は哲学、とりわけインド哲学、とくに仏教に造詣が深いわけなんですが、お生まれはソウルなんですか。

いや北朝鮮です。父は北支の生まれで、終戦後一九四六年、十九歳の時にソウルに来ました。父はキリスト者で、カール・バルトに心酔していました。私はソウルに来て学校に入りまして、予科二年終了後、文理科大学に入ったのです。専攻は哲学で、とくにキリスト神学でした。しかし、大学三年に起った朝鮮動乱が何といても、私の人生の方向を決定的にしました。私たち家族は釜山に疎開したりし、私も身体をこわしたりして、さんの年月でした。

——それは大変なご苦労でした。

実は、仏教への関心もこのころにすであつたのですが、実際には終戦になって身体の療養をかねて、お寺でしばらく静養する機会を得ましたことに、大きな転機があつたことです。とくにお坊さんと一緒に『大乘起信



徐景洙先生

論』を読んだ感動は大変なものでした。いずれにしても、戦争で親族や友だちを亡くしたことが私に人生の無常観というか、新たな宗教への出発を促したのです。

そして、東国大学の大学院へ入学し、卒論は「原始仏教の倫理観」というもので、和辻哲郎博士の著作には非常に恩恵を受けました。その後、ドイツのケルン大学に留学する好運にも恵まれました。現在まで東国大学で教鞭をとっているわけなのですが、やはり仏教信仰なくしては私の人生はあり得ないように思われるのです。研究の方は、仏教の根本真理を自分なりに理解しようと、原始

仏教やインド哲学、あるいは方法論としての必要性から宗教学全般を目に向けているわけですが。

——とこ

ろで、この辺で韓国の仏教の事情について少しお伺いしたいんですが、韓国の仏教の大きな宗派としては曹溪宗があるわけですが、やはり仏教は民衆の大半を占めているわけですか。

確かに一千万近い人口が仏教徒ですから、大きな勢力をもっています。韓国全体の人口が三千四百万人ということですから、約三分の一の国民が一応仏教の信者であります。

——その人たちは熱心な仏教徒といえますか。

いやあ、檀家制度がありませんので、一年に一、二回お寺参りをする人々を含めてということですね。年中行事としては、四月八日の仏生会、いわゆる花まつりが盛んですがね。ただ実質的にごく熱心な仏教信者の数となりますと、大分少なくなると思いますね。

——かつて、日本の占領時代には、日本的な形で仏教が伝えられたわけですが、現在では一般の人々の日常生活の中で仏教はどのような影響力というか、意味合いをもっていますか。

そのことは、やはり韓国では李朝以来の歴史的な事実として儒教の思想が強いわけですね。民間の土俗的な礼儀

の中には道教も一部残っています。つまり、李朝の政治態勢は制度的に排仏の立場であったわけです。その時代には、僧侶や僧尼はいわゆる賤民としていたがられていたわけです。社会的には最近になって、仏教は大部分存在価値を認められてきています。ことに近年の韓国のナショナリズムの主体性を求める視点から、学生たちや知識人の間でも仏教は改めて再認識の対象として受け容れられつつあります。そこでは現代に生きる仏教というようなことが、様々に模索されているようです。

——日本の場合でいいますと、知識人や一般の人たちの仏教への関心は、書店における仏教書や宗教書のブームをまき起こすほどになっていますが、本当の意味での信仰心ということになりますとまだまだ問題が多いわけです。知識層などはむしろ無神論者が多いといえますし、本は売れても望ましい仏教運動にはなっていないわけです。しかし、物質文明の今日、人々が精神的なものを求めようとする志向は日本でも次第に強くなっているわけです。

韓国では多少様相を異にしているようですが、宗教と社会ということを考える場合に、日本の仏教は、宗教の

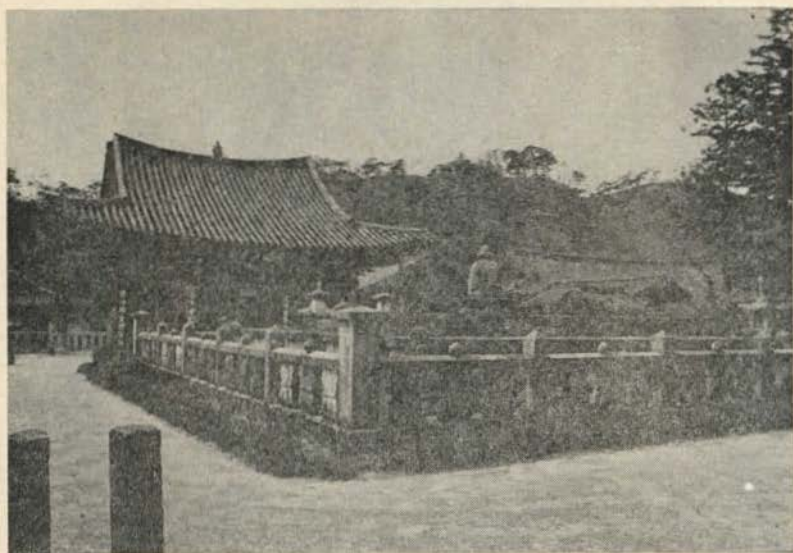
ために人間があるというような幾分顛倒した面が見られるように思われるのです。「宗教が社会の人々のために」というような根本的な使命観が希薄であるように思われるのです。間違っていますでしょうかね。

——はあ、耳に痛いことですが……。

たとえば、最近の仏教学徒の姿勢など、「仏教学のための仏教」という感じで、何か生きる仏教への熱意が感じられないように思われます。確かに文献は基本であり、大切なことは当然ですが、それをのり越えた信仰世界への志向と、社会への強い働きかけが今こそ要請されるのではないのでしょうか。

——まったくその通りで、いわゆる私個人としての信仰というか、あるいはその信仰体験の認識というか、そういう方面の取り沙汰がほとんどないわけですね。

そうですね。韓国の大学における私たちの役割は、そうした信仰心なり、宗教的実践観なりを若い学生諸君とともに話し合い、助言し合ううちに、私の場合でいうなら、そこに新しい仏教運動のあり方を見出して行こうとしています。たとえば、韓国には現在千三百ほどのお寺



韓国のお寺・松広寺

がありますが、その中でとくに仏、法、僧の三宝の寺として尊ばれている、通度寺（仏室、海印寺（法室、松広寺（僧室）や、その他仏国寺や梵魚寺などの歴史的なお寺、そうしたどちらかといえば観光化したお寺もそれなりに価値はあるわけですが、仏教の将来への発展ということからは、市々町々の小さなお寺を仏教の信仰道場としてより盛り上げて行かなければならないと思うのです。いずれにしても、韓国でも現代化の展開はめざましい成果をおさめています、まだまだ永く培かってきた歴史と風土はそのままに残っています。そうしたものを若い諸君の心に、いかに残し伝えて行くかが、今、私たちの前にある大きな課題であると思います。そうした問題への解答の努力のうちには、おのずから仏教信仰への新しい布教活動が含まれてくることでしょう。ともかく現実には、日本以上に未解決のむずかしい問題をたくさんかかえているのが、半島の先端の国であるわが韓国なのです。

——いや、その通りかもしれません。かえって先生に上手にお話しをまとめていただきました。本日はまことにありがとうございます。



仏典童話ひとすじの道

花 はな
岡 おか
大 だい
学 がく

(作 家)

私は、長い間、子どもの文学、児童文学というものを、ひとすじに書き続けてきている者であります。

さあ、もう、書き初めましてから、四十年を越すわけでありまして、それでいてこの年になりながら、なお、かたすみにはひっこんでぼそぼそと書き続けずにはいられないというのでありますから、いってみればこれは、私の「宿業」みたいなものだと思っていますのであります。

「宿業」とは、前世における業因でありますから、現世においてはたすよりほかはないわけであります。

さて仏典童話というものを書き初めましたのは、八年ほど前からであります。書き初めまして、まるでそれにとりつかれたように、がむしゃらに書き続け、現に今も書いているのであります。もちろん、普通の童話も書いてはおりますけれども。

仏典童話の仏典とは、いうまでもなく、仏教經典のこと、お経のことでもあります。

お経といえますものは、御存じの通り、お釈迦さまが、直接筆を取って書かれたものではなくて、いろいろな時に、いろいろな場所で、いろいろな人に向って説かれた、お釈迦さまのさまざまな説法を、そのまま覚えていた後の人々が集って、それを文字に書きあらわして出来たものであります。

仏教の教えは一つでありましても、「対機説法」といいます、聞き手の程度にしたがってその人たちに解るように、ちがった説き方をされましたので、その種類は随分たくさんあるわけであります。

そこへもってきて、後々のすぐれた仏弟子と呼ばれる人たちが、そのお経の注釈を書いたり、そのお経についての研究をまとめたもののが数多くありまして、いずれも、お釈迦さまの説法にかかりあいを持つものでありますから、これらも仏典の中に加えられておりますので、仏典の巻数は何万というおびただしい数にのぼっているであります。

そしてそれらの仏典の中には、数えきれないくらいた

くさんな、仏教説話がふくまれているのであります。

いうまでもなく仏教説話とは、仏教教義を誰れにでもわかるように興味深く説くために、古くからインドに伝承されている豊富な物語を使ったものでありまして、その使い方の主なる形は、本生譚ほんじょうたんと譬喩譚へいよたんの二つであります。

本生譚ほんじょうたんといえますのは、お釈迦さまが、その前身の菩薩であつたときに、さまざまなものに生れかわって、善行功徳をつまれたことを内容とした、過去世の物語のことであります。

譬喩譚へいよたんといえますのは、仏弟子や信者の現世的な行為や、動植物などのあらゆる出来事を取りあげて、教義をわからせるために、たとえ話として使っているものであります。

ところがそれらの仏教説話は、豊富さの点におきましても、多彩さの点におきましても、きわめて興味深く、くめどもつきない深い味があるのであります。

私が、仏典童話にとりつかれましたのは、もっぱらその点に気がついたからでありまして、すっかり魅了されてしまったわけであります。

おそらく、仏典童話という言葉をお聞きになった皆様方は、仏典童話とは、仏典の中にあるすばらしい仏教説話を、そのまま、子どもたちにもわかるように書きかえた童話のことであろうと、お受け取りになる方が多いのではなからうかと思えます。

子どもたちにもわかるように書きなおすという作業は、再話というのでありますが、そういう仕事なら、古くから、仏教童話と呼ばれて、すでに多くの人たちによって行われているのであります。

私は、仏教説話にすっかり心を奪われましただけに、ただそれを再話するというだけでは、どうにも満足でできなかったのであります。

なぜならば、仏典の中の仏教説話といえますものは、あくまでも教化のためのものでありまして、その後、当然のこととして仏教教義がくつついていくからであります。

いや、むしろ、仏教教義の方に重点がかかっているわけでありまして、それを解り易く説きあかすための本生譚であり、たとえ話でありますから、いくらうまく子どもたちにわかるように再話しましても、それは、説教じ

みた、いわゆるくさい話になるというのが、当り前のことであります。

仏教教育の現場などにおきましては、どちらかといいますと、そういうムキムキのくさい話が、むしろ歓迎される傾向にあるようですが、私は、それはたいへんな思いちがいではないかと思っていますのであります。

いかにも熱心に、話しに聞き入っているように見えても、或は読みふけているように見えても、そういうくさい話、説教じみたくさい話といえますものは、子どもたちの心の上っ面を、軽くなぜて通りすぎていくものでありまして、決して心の奥底まで浸透していくものではないからであります。

心の奥底まで浸透していくためには、その話が、あくまでも文学としての童話になっていなければならない、そのことが、私は、基本的要件であると思っているのであります。

文学といえますものは、(童話は子どもを対象とした文学であります)が、作者が感動したものを、文字を媒介として作品化し、それを読者に伝えて共感してもらうことを目的として書かれるものでありまして、その作品

が文学として、すぐれたものになっておればなっているだけ、読者の心に激しい感動を与えるものであります。

童話の場合は、やわらかで清純な子どもたちの心を、感動させるのであります。

感動するとは、心が根底的にゆれ動かされる状態でありまして、そんなふうには、根底的にゆれ動かされたものは、心の奥底にしみ込み、刻みつけられ、生涯を通じて消え去らないものであります。

それが、文学の機能でありまして、特に童話の場合、子どもたちの心にしみ込んだものの、刻みつけられたものの、感動を与えたものは、いつ迄も消え去らないのでありますから、その子の人間形成の上に、非常に大きな役割をはたすことになるわけでありまして、それこそが、童話の教育性であると、私は、考えているのであります。

つまり私は、仏典の中にあるすばらしい仏教説話は、従来の仏教童話がやっていたような、ただこれを再話するというような形では、説教じみたくさい話にならざるを得ない、それでは駄目だ、そいつを、何とかして、すぐれた文学作品にするという仕事をやってみよう、と思

い立ったのであります。

やれるかやれないかわかりませんが、とにかくやってみようと考えまして、八年ほど前から書き初めたというわけであります。

そこで私は、そのやり方、方法といまして、素材として非常に面白い仏教説話に、ただ取材するというだけに止めておこうと思ったのであります。

つまり仏教説話というものを、そのまま使うのではなくて、いったん私の心の中へ、そっくりそれをのみこもうというわけであります。

私の心の中で、その話を、ばらばらにほぐし、どろどろに消化してしまおうというわけであります。

そしてそれを、普通の作品を書くときと、まったく同じように、いささかも仏教説話の原型にこだわることなく、私の思うままに、ストーリーを改変したり、人物をふやしたりへらしたりして、自由に話を組み立て、そしてそれが、文学としての童話作品になるようにとのひたすら願いをこめて表現し、一つの作品を書きあげてみよう、考えたのであります。

したがってそれは、再話といったところに止ってい

た、従来の仏教童話とは異質のものでありまして、あくまでもそれは、文学としての純度を保った、私の創作であるところから、私は新たにこれを仏典童話と名づけたというわけであります。

私のいう仏典童話とはどういうものか、それは、仏教童話というものとちがったものであることは、これでおおよそ、おわかりいただいたと思うのでありますが、同時にまた仏典童話は、普通の童話とちがったものであることは、いうまでもありません。

仏典童話というものは、かならず、仏典の中にある仏教説話に取材したものでなければならぬということとは、欠いてはならない制約であり、特質ですが、それよりもっと大事なことは、仏教説話の背後にかならずくっついてゐる仏教教義というものを、仏典童話の作品の根本精神として、踏まえていなければならないということとであります。

仏教教義というものを、ムキムキに出せば、説教じみたくさい話にしかならないわけでありまして、それでは文学にはならない。

そういうくさい話はいけないと、私はいつていたので

ありまして、もちろん仏教教義を否定しているわけではないのであります。

いや、それどころか、仏教教義というものは、作品の表面にむきだしに出すべきものではなくて、いさかもくさは感じられないが、しかししないのではなくて、必ずちゃんと作品の底辺深くにひそませてゐる、そういうものでなければならぬと、私は思っているのであります。

そこにこそ、普通の童話とちがった、仏典童話の独自性があるわけであります。

ところで、仏典童話が、ぜひ踏まえなければならない仏教教義とは、ひっくりめたい方をいたしますと、それは仏教精神ということとあります。

それでは、その仏教精神とは何かといいますと、私は、それは、全てのものを、へだてなく、ひとしく愛さずにはいられないという、切なる心だといつていいと思うのであります。

そしてその心が、最もまっとうな形をとるのは、そうしてやれば、何かがはね返ってくるといった打算や計算は全然ない、（私達の心はそうじゃないでしょう、例えば珍

らしいものがあって、これを隣へおすそわけをする、それは確かに美しい隣人愛であります、実は心の片隅に、今これをやっておけば今度果が出る時分には、沢山持つてきてくれるだろうというような、はね返りを求める心がひそんでいるものであります、そんなはね返りを求める心は全然ない、また、なにになにのためにしてやるのだというような、恩^{おん}ぎせがましい、自己犠牲的な匂いも全然ない、宮沢賢治の言葉をかりていいますと、まったく「自分トイフモノヲ カンジ ヲウニ入レズ」でありまして、おのずからに、そうせずにはいられないからそうするという形をとると思うのであります。

いわゆる「無償の愛」といわれるものでありまして、はね返りなど全然求めない、一方交通の絶対愛であります。

仏教ではこれを「慈悲」と呼んでおりますが、仏教精神とは、私は、この「慈悲の心」だといっていいと思うのであります。

「慈悲」といいますものは、いうまでもなく平等で差別のない仏の深い、大きな愛情ということでありますが、『大智度論』という本には、それを、

「大慈とは、一切衆生に樂を与え、大悲とは、一切衆生の苦を抜く。大慈とは、喜樂の因縁を衆生に与え、大悲とは、離苦の因縁を衆生に与える」

というふうに示されております。

私は、子どもたちにもわかるようにと、それを、

「人のよろこびを心からよるこび、人の悲しみを心から悲しむ心」

だといいかえております。

しかしその心は、おれがおれがというエゴイズムに振り廻されて、常に他とけわしい対立をつづけている現代人には、ほど遠い心でありまして、それは、おれがおれがという心、自分というものを捨て去らない限り、絶対に持てない心だといわねばなりません。

仏教では、そのことを、「捨身」といっております。

「身を捨てる」ということ、「他のために死ぬ」ということであります。

「他のために」といいますと、なにか自己犠牲的な匂いがともないますが、そういう「ためにする」といった行為ではないのでありまして、おのずから、そうせずにはいられないから「身を捨てる」のでありまして、したが

って「捨身の心」は、そのまま「慈悲の心」であり、「仏心とは、大慈悲心これなり」といわれております通り、それはまたそのまま、「仏心」、仏の心であるわけであります。

私の仏典童話「うえたとら」は、『六度集経』や『賢愚経』その他の経典に出ております、いわゆる「捨身飼虎」といって、たいへん名高い話でありまして、その内容は、よく知られている通りであります。

すなわち、山中で道に迷った三人の王子は、七匹の子どもを抱えた飢えた虎にでくわすわけですが、上の二人の兄達は、ただ自分だけ助かりたくて、兄弟のころなど考えるいとまもなく、争って逃げ去ってしまいましたが、一番末の王子は、今にも死にそうな飢えた八匹の虎を見ますと、その命を助けてやりたいという一閃な思いに燃えたち、そのためには、自分の身体を食べさせてやるより外はないと考え、逃げるどころか、自分の方から虎に近づいていって、食べられてしまうというわけがあります。

この王子の行為こそ、まさに「捨身の心」でありまして、餓死寸前の八匹の虎のために、自分の身体を投げ出

してやるのだというようた、恩ぎせがましい思いや、そうすることが、大きな善根功德になるのだというような、そんな打算や計算などのかけらもないわけでありまして、ただおのづからに、そうせずにいられなくて、そうしたただけのことで、当然の結末として白骨になってしまったのであります。

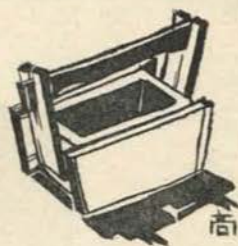
自分のことしか考えない現代人は、恐らくこの王子の行為を、けたはずれの愚かな行為だとしか受けとらなと思います。それはなんでも、合理主義、科学主義でしか、ものを考えることの出来ない、実は非常は恐ろしい「心の狂い」でありまして、世の中が今のようないがたい混乱に陥っている最大の原因も、そこにあるのではないかと、私は思っているのであります。

他を生かすために、自分の命を捨ててかえりみなかったという、王子の心ほどに、至純な愛が、どこにあるでしょう。

この「捨身の心」こそ、仏ほとけの心であり、「慈悲の心」であり、私が仏典童話がぜひ踏まえないければならないといっております「仏教精神」とは、その心なのであります。その心を踏まえて、すばらしい仏教説話にとり組み、

それをすぐれた文学としての童話に仕上げましたとき、そこに私の一図に願っております「仏典童話」が、おの

ずから生れてくるわけであります。



自治意識を育てるために

よし
みづ
げん
ゆう
吉水現祐

(東京都台東区議会議員
台東区清川光熙院住職)

さきごろ、総理大臣の諮問機関である第十六次地方制度調査会から、「住民自治意識の向上に資するための方策に関する答申」がなされた。

この答申は、戦後、民主主義国家として再出発したわが国において、新地方自治制度が制定施行されてから三十年になり、その間、その時々々の社会経済情勢に対応し

て数次の改正がおこなわれたが、さらに国民の生活水準の向上と価値観の多様化等の状況の変化に適切に対応するため、現行地方自治制度全般について検討をおこなう、地方行財政の基本的諸問題については引き続き審議することとしたが今回は自治意識の向上に資するための方策が提言されたものである。

ここでまず考えられることは、一人の人間が誕生してから年老いて死に至るまで、英国風に言えば、「揺りか

「ごから墓場まで」地方公共団体が世話していることである。

母親が妊娠して、母子手帳の交付からはじまり、誕生、乳幼児検診、公立の保育所、幼稚園入園、公立小・中・高等学校への入学・公園・野球場・体育館の利用、あるいは日常生活においてごく自然に利用している道路、交通安全施設、上・下水道、公営交通機関等々、細かく列挙すれば、ぼう大な事務を市・特別区・町・村と都道府県が分けあって仕事をしているわけである。

これら住民生活にとってごく身近かな仕事は、一体だれがやっているのか、もちろん住民自身の手で住民自身の責任において、当該地方公共団体の運営を行なっているわけである。

○

ところが一人一人の住民は、日常生活においては特にこのことを意識してはいないと思われる。公園も道路も自分達の財産であることを忘れていることが多いように見受けられる。住民自身が納めた税が公園や道路に使われ維持されていることや、この税の使途についてほとんど

関心を示さないことがうかがわれるのである。

これは、政治に参画しているという意識が希薄であることを示しており、前述の答申においても「住民の参政権は制度的に保障されているが、この参政権を一人一人の住民が良識に基づく目覚めた住民意識の上に立って適正に行使しているかどうかによって定まるというべきである」と述べていることから明らかである。

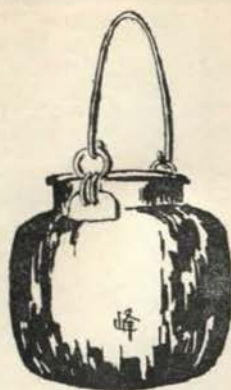
このような住民自治意識の低さをいかにして高揚させるかについて考究することは、自治省や地方自治体のみが考えるばかりでなく、住民自身の中で論議され考えられることが大切であり、こうして地方自治に対する関心を高める方策が生み出されることが理想である。住民の中には、真に自分の住んでいる地域を愛し、生活環境の改善や住民相互の和を強く望んで積極的に住民自治の底辺を支えている人々が多数いる。この力がコミュニティの環を広げる原動力である。コミュニティの健全な育成は、住民の連帯意識醸成そのものであるから、行政担当者にとってもコミュニティづくりが新しい住民参加の経験の場となることを十分認識することは当然である。こうした住民参加の経験の積み重ねが将来その地域の大きな

問題を解決する基盤が培^つなわれるとするゆえんである。

○

自分の住んでいる町を住みよくするためには、自分自身が努力することも大切であるが地域の人達と常に話し合うこと、地方議会の活動に十分関心を持ち、議会に積

極的に要望を寄せること、さらに選挙に当っては慎重な一票を投じ、当選した議員の活動の適正な評価と自分達の考えを常に伝達できる機会をつくるようにすることなどが考えられる。これが自治意識を育てる要件であり、私がコミュニティづくりを強く推進しようとする理由である。



心の履歴書から

かわ うち ち こう
川 内 知 光

(京都・西賀茂西方寺住職)

羨(しつけ)

毎年八月十六日夜、京都市に於て行われる四大行事の一つ、大文字五山(大文字、妙法、船形万灯籠、西方寺、左大文字、鳥居形)の会長外一名計十人が、宝塚温泉にて

一泊の、今の言葉で言えば自費の反省会を催したことがあるのです。

終戦後何年もたっていない頃の古い話ですが、当時大文字の会長のさんはその浄土寺町の名門であり、又府会議員をせられたこともある老人と、四十歳近い私とが先

づ一風呂浴びようと、二人で温泉につかったことがあるのです。

それから宴会に移ったのですが、Fさんは「私今、川内さんに感心したことがある。川内さんはお坊さんだと聞いているが、お坊さんは丸裸になってもお坊さんであって欲しい。私はお湯に入る前に下の方にお湯をかけて洗って簡単なかり湯をしてつかったのですが、川内さんは石鹸にて下の方を丁寧に洗って入られたのには感心してしまった」とおおせられました。恥かしいやら嬉しい気分でしたが、これは幼き頃母と一緒に風呂に入る時に嫉として教えられた一コマであります。

市民共済会のこと

京都市社会課職業係の主任をしていた頃の話です。同課内に京都市市民共済会という会があって別動隊として社会福祉の仕事をしていたのですが、私にその会計理事をやるような話がありました。私は計算は至って下手で算盤も頼りないので断りましたが、会内の女事務員で計算の上手な娘をつけるからとの事で引受けることになりました。

「これを気の毒な人に差上げて下さい」と五円十円、多いのは二、三十円のお金を持って尋ねて来る人があります。私は受取って領収書を書いて、その金は一階にある市金庫の第一銀行に市民共済会の口座を設けて、それを給仕に直ちに入金せしめていたのであります。

その年の年末に中間決算しましたところ、前年度全体よりも四百余円の増額になっているのです。前任者が幾分のピンハネをしていたとは証拠もなく言えませんが、理事会では余りに多いのに驚いて会計理事の私に金壹百円の歳末手当を出すことになったのです。勿論その金は会計の娘さんと給仕に差少与えることにしたのですが、昭和八年十二月二十五日逝去しました父の枕頭にて「お父さん生れて始めて百円札が拝めることになった」と報告いたしましたして、父に喜んで頂きました。

土地と人物

私等京都市社会課に勤務していた連中が社友会と名乗って年一回位集まることにしていました。

その会合の折、二、三人の人が私の前に来まして、当時の課長が頭脳明哲で神経質の人でしたが、係は庶務保

護、残業の三係があつて私は残業係の主任をしていたのですが、他の係の人が私の所に「課長と喧嘩しました、市役所をやめます」と相談に来られるのです。

私は事情を詳しく聞いて、課長の所に行つて本人の申し分を言い、課長の考えを聞いてから、本人を呼んで結局軽く謝罪せしめて元の状態に返したことは二、三に止まらなかつたのです。

「退院料を頂いて今日あるは川内さんのお蔭です」と言うのです。ところが私の隣席にいたW君が僕にも同じような経験がある。課長と喧嘩して、その時には川内さんは中央残業紹介所長をしていられたので、そこに行つて「市をやめます」と言えば、川内さんは「君はやめなさい。君のような人は（本人は言わなかつたが大人物）は京都の如きケケチした所には育たないから大陸に行きなさい」と言われたので、京大本庄教授に御願いをして、満鉄に入社したのです、その後企画院に転じて今日に来たのです。

「僕の性格としてやめよ等とは言わないと思うが……」
「しかし現にやめて満鉄に行ったのです、恩は感じます
が決して恨んではいません」

W君は今東京都から衆議院議員に立候補当選して某党の中堅幹部として活躍して将来に望みをかけられている人です。東京都での立候補は地方と違って何等の地盤が無いので大変苦しい戦いだと思いますが、このW君に私は大きな期待をかけているのです。

不請の友

仏教に「不請の友」という言葉があります。「ふじょうのとも」と読んで頂きたいのですが、菩薩は不請の友と言います。不請の友とは、求めていないのに友達のようにしてあげるといふことです。菩薩とは言ふ迄もなく観音菩薩、地藏菩薩、勢至菩薩、普賢菩薩、文殊菩薩などは御存知でしょうが、菩薩という方は願を立てて仏になろうとしていられるお方ですが、菩薩は向上の一路を辿つて退転することの無い方であります。その例は、昔法蔵菩薩と言う方は四十八の願をお立てになり、その中南無阿弥陀仏と称えたら極楽往生させてあげるという願が成就して仏におなりになり我々の信じている阿弥陀仏となられたのであります。

我等も菩薩の心掛けをしなければならぬのでありま

して、不請の友となるように心掛けねばならないと思います。

数年前、京都府警察部の雑誌「平安」に何か書くように頼まれました、不請の友ということを書いたのでありますが、自分は会計係だから会計の事だけをやっていたら良いと言うのでなく、交通違反をしている人があれば黙って通りすぎずにその人を注意して上げるようにしなければならぬ。警察官は人を罰しようとはばかり考えず、人を導くことに力を尽して欲しいと書きました。

私達は十数年前孫達と城崎温泉に行った帰り汽車の中で若い十人程の団体の若者がビールビンを片手に喧嘩をしているのです。満員に近い車中の人々は見て見ぬ人をしてるばかりです。私の性分としてじっとしていられずその中に割って行って争いを止めました。

「君達は口には平和を叫んでいるのでないかと思うが会社の同僚と戦争の真似ごとをするのは感心しない」と洋服に少し飛び血をつけて解決いたしました。

私が民生委員をしていた時、見知らぬ人が来寺して「結婚したと言う証明をして欲しい」と言ってきたら「何に使うのですか」「離婚訴訟に使いたのです」

「一寸待って下さい、私は民生委員であり然も僧侶です。離婚します、ハイそうですかと言って証明することは出来ません。私があなたの娘さんの結婚せられたことは初耳です。一応私は切角結婚せられたのですから、何とか元の鞘におさまるように努力させて下さい」と言って帰って貰って両者の間に入って数回往復いたしました、結局は話はまとまりませんでした、その人が市長の所に行つてあんな民生委員はやめさせよと陳情に行かれたそうです。秘書課長からの電話で知りました。

「義を見てせざるは勇なきなり」と言う諺があります、又「さわらぬ神にたたり無し」という言葉がありますが、さわらない人が現代は余りに多いのでは無いでしょうか。

私の知っている人は、ある集まりの中の二人の間にもめごとがあつても、さわらぬ神にたたり無しと言った態度をとった人がいますが、その人が今ある役を持っているようでありますが、こう言う人が役を持つようでは世の中は良くなりません。世の中の役職の人、代表者は全部「義を見てせざるは勇なきなり」の人が占めるようになれば社会は実に良くなると思うのですが……。

『法句經』は、ブツダの教えを詩のかたちにとまとめたものである。明快に説かれたアンソロジーであり、そこには、まだ仏教独特の難解な術語はない。

この『法句經』、すなわちパーリ語『ダンマパダ』として初めて公刊されたのは、一八五五年（安政二）であり、デンマーク人、ファウスベルによってラテン訳をつけて出版された。

法句經

きょうきん

インドの魂にあこがれたドイツのヘルマン・ヘッセは、この『ダンマパダ』を愛読していたといわれる。

このような『法句經』は、わが国でも仏教伝来以後、長い間、人々に親しまれてきたと思ひやすい。しかしこの『法句經』を知り得たのは、大正四年、高楠順次郎がオックスフォード大学でインド学を学び、この經を研究してからのちにおいてである。

明治以前の日本仏教においては、維祇難等による漢訳本があつたにもかかわらず、個々の詩句が取り上げられるのみで、『法句經』全体としては全く顧みられなかった。というのは、歴史的な經典の成立が不明であつたために、すべての經論は釈尊の教えであると固く信奉されてきたからである。

仏教を歴史的に研究し始めたのは、十九

世紀に入ってからヨーロッパの学者が行なつたのであり、わが国の学者もそれに追隨したのである。

『法句經』の註釈書には同じパーリ語で書かれた『ダンマパダアッタカター』がある。この書は、一つ一つの偈が説かれるようになった因縁を示したものであり、『ジャータカ』と共通の話が多く、説かれる形式も同じである。註釈者はブツダゴースと

されているが、明確ではない。同じく因縁譚を説くものとして、漢訳經典に『法句譬喻經』がある。

『法句經』に類似した詩句を集めた有部所伝のサンスクリット本に、『ウダーナヴァルガ』があり、ドイツのベルンハルトによつて校訂出版された。この系統のものとして、チベット訳『法句經』、竺仏念訳『出曜經』、天息災訳『法集要頌經』がある。

また大衆部のうちの説出世部に属する『マハーヴァスツ』に引用された『法句經』もある。

さらに、一八九二年、コータン地方でカロシニティ文字で書かれた『法句經』が発見された。これは一九六二年、イギリスのブラフによつて出版され、『ガンダリー・ダンマパダ』として脚光を浴びている。これを伝播した部派は法藏部である。

それぞれの部派によつて同じ『法句經』でも、内容が異なるのは、原本が確定していなかったためであらうとされている。

諸惡莫作 衆善奉行、自淨其意 是諸仏教（『法句經』一八三偈）



ウラ・オモテなし

浄土教の流れ

△九▽

竹 たけ 中 なか 信 しん 常 じょう

(大正大学教授・文庫)

— 〇 —

わたしは浄土宗のものにとって、ほかのことは知らなくても、ただこれだけは忘れてならぬものに、『一枚起請文』がある。その一節に、

「……三心四修と申すことの候は、みな決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思いうちにこもり候なり……」

とある。三心(三つの心)と四修(四とおりの念仏のとなえ方)ということは、極楽に往生するにはナムアマダブツ

よりほかにはないのだと、しっかり信じて唱えることだというのである。しかし、理窟はい現代人にとっては、「しっかり信じろ」といっても、仲々すなおには信じない。そこで、逆にいうと「しっかり信ずる」のには、そのもとに三心・四修があるからだということになる。そうすると、現代人はすぐに「それでは三心とは何か。四修とはどうすればいいのか」と反問するにちがいないのである。もっともこうしたことは法然上人の時代にもあったのであろう。それゆえ、法然上人は、『一枚起請文』では、大変簡略に、一所懸命に念仏を唱えることの中に自然に三心がこもっているのだといわれ、また阿弥陀経の中の「一心不乱」の一心がすなわち三心なのだとお

つしやっておられるのであるが、理窟をこねるものために、三心ということを、『選択集』の第八章段でくわしく説明して下さっている。その章題は、

「念仏の行者は必らず三心を具足すべきの文」

となっている。ここにいう「念仏の行者」とは浄土教を信じ、弥陀の浄土に往生しようとながうものことである。その冒頭に、

「観無量寿経にのたまわく、もし衆生ありて、かの国に生ぜんと願うものは、三種の心をおこして、すなわち往生す。何等をか三心とす。一には至誠心、二には深心、三には廻向発願心なり……」

つづいて、

「同経の疏（善導大師の観経についての解釈書）にいわく、経に一には至誠心というは、至とは真なり、誠とは実なり。一切衆生の身・口・意業に修するところの

解行、かならず真実心のなかになすべきことを明かさんと欲す……」

と述べられている。三心とは至誠心・深心・廻向発願心であり、その第一の至誠心とは真実心であるというのである。いつわりのない「まごころ」である。つまり、うわべだけの念仏ではなく、心の底からまじめに唱える念仏でなければならぬのである。

ここで、深く法然上人に敬服することは、真実心を説明されるのに、まづ、真実でない心、いつわりの心、むさぼりの心、おろかさの心、そういった人間の赤裸々な心を示されていることである。そして、そうした心を捨て去って、人間性本来の、すなおな、まごころを描き出しておられるのである。今日でこそ、精神分析学だとか、深層心理学などで、人間の心の構造が二重、三重になっていることを説いているが、法然上人は八百余年も昔に、すでに、人間の心の仕組をはっきりととらえていたのである。そして、二重三重になっている人の心、ウラとオモテのあることを説明されたのち、真実心というのは、ウラ・オモテのない、あるいはウラとオモテとが

びったりと一致している心の状態であるといわれている。『十二ヶ条問答』に、

「至誠心というのは、人なみの心をもて、釈土のいとわしからぬをいとうよしをし、浄土のねがわしからぬをねがう気色をして、内外ととのわらぬをきらいで、まことの志しをもて、釈土をもいとり、浄土をもねがえとおしうるなり……」

とおっしゃっているのは、このことをいうのである。

— 〇一〇 —

「二は深心。深心というのはすなわちこれ深く信ずる心なり。また二種あり。一には決定して深く信ず、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し、常に流転して出離の縁あることなしと。二には決定して深く信ず、かの阿彌陀仏は四十八願をもって衆生を摂受したまう。疑いなく、うらおもてなくかの願力に乗じて定めて往生を得と。」

三心の第二番目がこの「深く信ずる心」なのである。

「深い」ということは「骨髓に徹する」ということなのである。うわつらの、浅薄な信心ではないのである。ウラとオモテのない、一つになったまごころで、深く骨の髓まで信ずるのである。何を信ずるのか。自分がいかに罪深い悪人であるかということを信じ、同時に、どんな悪人でも弥陀の本願を信じて念仏すれば、かならず救われると信ずるのである。つきつめていえば、自分を深く反省し、仏を信ずることなのである。さらにいえば、低く頭をさげて、仏を仰ぎ信ずるのである。ふんぞりかえっていては、仏さまのありがたさは分らない。山の高さはその麓に立つとき実感されるのであって、遠くから眺めていたのではわからない。

信心も、深ければ深いほど、仏のありがたさが身にしみるわけである。深い心で深く信ずる。これが念仏者にとって忘れてならぬ心なのである。

三番目の心とは何か。それは「廻向発願心」という心である。すべてのおこないとことばと気持ち(身・口・意の三業)いいかえるなら全身全霊をただ一つの目標に集中することである。その目標とはいってもなく、「弥陀

の極樂浄土にうまれる」ということにほかならない。わたしたちは毎日の生活をいとなんでいる。その「いとなみ」すべてを浄土往生という目標にむけて統一することなのである。生活のいとなみの中にもいろいろのことがある。日に三度食事をする。一般には食事は空腹をいやすため、つまり肉体を維持するためだといわれている。しかしそれだけのために食事をするのだろうか。それでは肉体は何のために維持されるのか。少しでも健康で長生きし、それだけ念仏の功德を積んで、浄土往生するために肉体を維持するのである。そのために食事をする。——これが廻向発願心なのである。されば、法然上人のおことばにも、

「人の命は食事のとき、むせて死することもあるなり。南無阿弥陀仏とかみて、南無阿弥陀仏とのみ入るべきなり」(勸伝「二十二」)

とあるように、食事も南無阿弥陀仏、眠るのも南無阿弥陀仏、働くのも南無阿弥陀仏。これが廻向発願心なのである。しかも、このような心がおこるのは、その裏づけ

に至誠心と深心とがあることはいうまでもない。

このように、全生活を一つにむけて日々を送るとき、人の心には限りない喜びが湧いてくる。朝起きるから、夜眠るまで、たべるのも、働くのも、休むのも、すべてが楽しくてしょうがない。このような人の念仏こそ、三心具足の念仏なのである。法然上人も、

「踊躍歡喜の心の起りたらん人は、自然に三心は具足したりとしるべし」

といわれているのである。

— 〇二〇 —

法然上人は善導大師の教えをすなおに、そのまま受け継がれ、三心の中の廻向発願心についての「二河白道」のたとえを、そのまま引用されている。

二河白道のたとえは、人生を「旅」にたとえたものである。一人の旅人が曠野を一人切りで旅をしていると、後から、強盗や悪獣が追いかけてきた。おどろいて西の方角に向って逃げてくると、目の前に、火と水の河があ

らわれた。北側は荒々しく波立つ水の河、南側は紅蓮の炎をあげる火の河である。後からは悪賊猛獣がせまり、前方は火と水の河。何とかして河を渡ろうとよくみると、火と水の両河の間にわずか四・五寸の白い道が一本、むこう岸までとおっている。しかし、それはいかにもほそく、片方からは荒波がかぶさり、他方からは火焰が吹き寄せ、とても渡ることはできそうにもない。旅人は進退きわまって立ちすくんでしまった。その時、こちら（東岸）岸のどこからや、涼やかな声で、

「汝、おそれることなく、その道を進め」

と聞え、その声に応じて、むこうの西岸から温かい声がした。

「汝、声をたよりに渡り来れ。われ汝を守るであろう」

旅人は、決心して、東岸の声（釈尊の教えの声）に送られ、西岸の声（阿弥陀仏の招きの声）をたよりに、その白い道を一步一步と足を踏みしめ、心に仏を念じ、口に仏

名を称しながら、悪党どもの呼びかえす声を耳にかけず、一心不乱に渡って無事に西岸つまりみ仏の国につくことができたのである。

これは、わたしたち人間のその日その日のありのままなる姿をたとえているのである。わたしたちの毎日の生活は、いろいろの雑事に追われ、心の中ではあせり、むさぼり、いかり、ねたみつつ生きているのである。少しでも油断をすると、雑事や煩惱のとりことなると、自分の本当の目標を見失ってしまうのである。しかし、み仏の教え（声）によって、心をおちつけて反省してみると、そのように波立って静まることのないわが心の中にも、ほんのわずかに、ほそぼそではあるが、み仏の力にすがって理想の国に至ろうとする「善い心」のあることに気付くのである。このほそぼそとした善心が「白道」なのである。そして、このような心が自分の心の中にもあるのだと気付いて、勇気をふるって進もうとする心が「清浄願往生心」であり、その姿が「廻向発願」なのである。長からぬ人生をこの「願生心」でつらぬいて、日々感謝の心で念仏する。これが浄土宗の念仏の総仕上げということになる。

■読者の声■



お彼岸を迎える心

やまもと しょうざん
山本 誠 山

浄土宗のお寺では、三月と九月、お彼岸会と申して、西方の浄土を欣慕し仏道増進を願う法要があります。御本山はもちろんのこと、各寺院も伝統習慣によってそれぞれ特色を出して修し、賑やかに勤められる寺もあります。

在家はお彼岸団子を作り、ご近所の家へおくばりする風習があります。お供物を大勢で分け合うと功德を増すといって、知らない人でも施し物を差し出す場合があります。これは布施の現われであります。彼岸の行事は日本の国民的な行事で、今日なお大きい影響があります。彼岸という言葉は、くわしくいうと、「到彼岸」で

ありまして、その言葉にはやはり意味があります故、それについて申し述べます。

今、私共が立つて足下に踏まえている世界は、現実の世の中であります。しかるに私共は、この世の中と別にもう一つの世界が存在することに気付いている人が少ないのであります。それは肉眼で見えることはできないけれど、私共の淨い心によって拝むことのできる仏様のお国、それがお浄土であります。私共が「彼岸」と申します永遠不滅の世界こそ、このお浄土であります。それでその平和な世界へ渡る道を修行する期間が、春と秋に来る七日間であります。

暑さにあえいだ真夏の苦しい季節から、虫の声に夜の長きをしみじみ感ずる秋に渡つてのこの期間にかこつて、迷いの世界から、安楽の私の世界へ渡る修行の時が定められたのであります。その修行は道徳で、六つに分けて教えられ、その第一を布施といっています。昔インドの王舎城に跋提長者といつて、生れつきいかにもの惜みの心が強く、無慈悲で頑固な長者が住んでおりました。邸には七重の門があつて、それぞれ門番を置いて、物乞いの者を決して中に入らせぬようにしておりました。跋提の妻は仏陀に縁の深い質多長者の妹でありました。ある日、跋提長者が妻と、仏陀のお噂をしていると、ちょうどそこへ一人のご出家が姿を現しました。ご出家は重々しい口調で、「私は仏陀の弟子で目連と申す者じゃ」と申されました。跋提が「何か御用でございませうか」とお尋ねしますと、「お前に法を説きに來た」と仰せられた。そこで、それを聞いて長者は心のうちで、「出家沙門は物乞いを勤めとしているから、今にきつと食物の話をするに相違ない。その時は、食物はないと答えよう」とひそかに考えました。けれども目連は、はやくもそれをさと、すぐ説法を始めました。「仏陀は二

つの施しをお説きになった——。仏陀がお説きになった二つの施しというのは、一つを法の施し、もう一つは財の施しである。わしは今、お前へのために法の施しを説こう。心して聴くがよい」と。跋提は法の施しという言葉を聴いてホッとして胸をなでおろしました。ところが次に目連が五つの大いなる施しをしないでならぬといつたので、再び不安な心を起しました。すると目連は、「五つの大いなる施しとは財の施しではない」と断つたので、やれやれと思ひました。目連は言葉をついで、長者よ、五つの大いなる施しとは、

一つには殺生をしない。

二つには人の物を盗まない。

三つは貞淑であれ。

四つには嘘をつかない。

五つには酒を飲まない。

——人は常にこの五事を、修習しなければならない。長者はこれを聴いて大いに喜びました。自分は殺生をしないから第一の施しを行っている。自分は多くの財を持

っているから、人のものをぬすむ必要がない。すなわち第二の施しを行なっている。自分は一人の妻を愛し、かつてよその女に心をかけたことがないから、第三の施しも行っている。自分はまた嘘をつくことをこのまゝない。また酒をもたしなまないから、第四、第五のいずれの施しも行っている……。長者はすっかり安心してしまいました。と同じように、何となく目連に供養がしてみたいような気持になりました。何を差し上げたらよいでしょう。出家は平生に坐禅にはげんでおられるから……。そうだと、毘がよからう。長者は蔵の中へ入って行きました。そこには大きいやら、小さいやら、毛皮のやら、網のやら、いろいろな毘が沢山ありました。それぞれを手にとって、一番粗末なものを探しておりました。すると外から目連の声がしました。「もの惜しみを起すな。施しをしたい心のままに施しをせよ」と。長者は矢庭に美しい真白な毘を手にとって、蔵から駆け出し、目連にささげました。

その時目連は、跋提に向って、「毘がうれしいとは思はぬ。しかし施しの心を起したのがうれしい。跋提よ、この心をもって、普く多くの人々に情け深くせよ。情け

心は人を喜ばせ自分を浄めるものだ。長者よ、良い田には良い実が稔るように、お前もろもろの福德を受けるであろう」と仰せられたので、長者の心は一時に柔ぎました。「ああ、私は救われました」と叫ぶや否や、両眼からどつと喜びの涙があふれました。先き程から傍にいた妻は、夫跋提が目連に導かれて淨い心を起したのを見て、膝を地上につけ、掌を合せて目連を拝み、感謝を捧げました。

「今日彼岸菩提の種を蒔く日かな」。仏道に入門して先ず最初に修行しなければならないことは、施しであるといわれます。一紙半銭の供養をなせば、未来はお浄土で九品の蓮台に生ずる無量の功德が具わることの意味合せて布施結縁の尊さが偲ばれます。布施とは、梵語で檀那（ダーナ）といって、わが国では施与することを意味しています。思うに、施しは自分の喜捨の志しを、ものに托して表現するのであると考えられます。またその心には邪念がなく、自己に執着しないから、大自然と調和を保って、人生が楽しくなりやがて解脱に進むことができるでしょう。



法数術語十二カ月（九月の巻）

宝田正道
たから　だ　まさ　みち

九夏きゅうげ

一夏九旬、すなわち九十日の間、外出せずに僧が研修に励む安居の意。インドでは、もと雨期の三カ月間、外へ出ると草を踏んだり虫を殺したりする機会が多いとして、僧房に籠り修行に専念した（雨安居）が、禅ではこれに準じて、夏冬のそれぞれに夏安居・冬安居を実施する習慣を生じた（九旬禁足）。諸宗派では、それぞれに一定期間、安居として修行に専心する結集を行う。

九族きゅうぞく

自己を中心として、上は父母、祖父、曾祖父、高祖父までさかのぼり、下は子、孫、曾孫、玄孫まで下る、都合九代にわたる親族の意。このうち、一人でも出家すれば九族すべてが天に生れる、といわれるほどむかしは出家することの功德が大きく評価されていた時代もある。

九字名号
くじみょうごう

浄土真宗で本尊阿弥陀仏の別徳として、「南無阿弥陀仏」の六字名号の代りに「南無不可思議光如来」の九字を名号としてたてたもの。同宗ではこのほか、「十字名号」（一）を使うこともある。

九種横死くしゅうおうし

九横とも略称する。人間の受ける非業の死に九つの原因を挙げる。経によって若干異なるが、たとえば『薬師経』では、①罹病しても医療を施さない、②悪事を働いて処刑される、③快樂三昧で身を滅す。④火事により焼死する、⑤水に溺れて死ぬ、⑥山野に入つて野獣に殺される、⑦断崖から落ちる、⑧毒物にあたる、⑨飢えや渴きで悶死する、などの九因を説く。『九横死経』という經典もある。

九種淨肉くしゅじようにく

比丘がやむをえない場合に限り、食べることを許される九種類の肉。①殺すところを見ない肉、②屠殺される叫びを聞かない肉、③祭天などの行事のため捧げる肉で、己れのために殺されたものでないと知った肉、④寿命が尽きて自然死したものの肉、⑤動物の食べ残した肉（以上を「五種淨肉」という）、⑥自ら手を下したもので

ない肉、⑦死に、あるいは殺されてから日が経って乾燥した肉、⑧肉と知らず、偶然に口に入った肉、⑨以前にすでに殺していたものの肉。

九年面壁くねんのめんぺき

苦難に耐えて根気よく物事を続け行ふ譬え。禅宗の始祖達磨大師が、崇山の少林寺において、九年間も壁に向つて坐ったまま動かさず修行したという故事に基づく。

九品往生くねんおしょう

浄土に往生するのに九つの階位があると説く『観無量寿経』による分け方。すなわち、上中下三輩（↓）のうち、上輩に上品上生・上品中生・上品下生、中輩に中品上生・中品中生・中品下生、下輩に下品上生・下品中生・下品下生を分け、あわせて九位としている。それぞれの行者を迎えるために、「九品蓮台」とか「九品浄土」が区別され、「九品弥陀」を設けて、各仏は「九品印」で表示される印相を結んでいるとする。

日 本 仏 教 の 宗 派

〔3〕

南 都 六 宗 (三)

俱 舍 宗
成 実 宗

○ 俱 舍 宗

インド仏教の流れにおいて、釈尊時代あるいはその滅後しばらくの期間をさす初期仏教の時代の次に登場するのは、最初は上座部、大衆部の二派、その後様々な分派をくり返した部派仏教の時代である。普通、「インド小乗二十部派」と総称され、一般的には釈尊滅後百年頃に

はすでに根本二部派の分裂があり、さらに滅後二百年頃から三百年以後にかけて枝末の分裂がなされたといわれる。この部派仏教を称して、別にアビダルマ(阿毘達磨)仏教ともいうが、これはこの時代の仏教の教理的特色として、釈尊の教法(ニダルマ)に対する(ニアビ)分析的な考察研究が中心であったからである。つまり、アビダルマとは「法の研究」という意味である。そして、説一切有部(サルヴァースティヴァーディン)は部派仏教のもっとも代表的な一派であり、アビダルマ哲学の典型的な教学を示す学派である。この部派のもとで、紀元二世紀頃、『六足論』、『発智論』と展開されてきたアビダルマ仏教を集大成したのが、『大毘婆沙論』二百巻である。実に、世親(ヴァスバンダ、四〇〇―四八〇)の著わした『俱舍論』、くわしくは『阿毘達磨俱舍論』は、この歴大なる『婆沙論』の綱要書として、世親が経量部(サウトヴァンティカ)の立場からまとめたものである。

南都六宗の一つとして数えられる俱舍宗は、この『俱舍論』を中心にこの他のアビダルマ論書を主として研究する日本仏教の学問宗である。さて『俱舍論』は、日本仏教に先立って、中国においては、真諦(バラマールタ、

四九一五六九）が二十二卷本（旧訳）として翻訳し、さらには玄奘（六〇〇—六六四）が三十卷本（新訳）として再訳した。中国、日本では普通には玄奘の改訳になる「新俱舍」を正依とし、俱舍学の興隆も玄奘門下の神泰、普光、法宝など逸材の輩出によって展開した。普光には『俱舍論記』（光ノ記）があり、法宝には『俱舍論疏』（宝ノ疏）がある。また円暉の『俱舍論頌疏』も恰好の解説書である。

ところで『俱舍論』三十巻の内容は、古来から、「界二、根五、世間五、業六、隨（眼）六、賢聖四、智二、定二、破一、是名俱舍三十巻」というように伝承されており、それぞれ界品二巻、根品五巻……というように一部九品三十巻の各章品の全容がまとめられている。そしてその教義内容は、(一)界品と(二)根品は、いわゆる「五位七十五法」というアビダルマの法の体系が説かれる章で、物質と精神の二面から現象世界の成立要素を分析している。ちなみに五位とは、色法（物質）、心法（精神）、心所法（精神に付帯するはたらき）、心不相応行法（精神にとまわらないもの）、無為法（無限定なもの）との五つである。また、(三)世間品、(四)業品、(五)隨眼品の三章は有漏（迷い）の

世界を記す章品であり、(六)賢聖品、(七)智品、(八)定品は無漏（悟り）の世界を記す章品である。そして最後の(九)破我品は偈頌の部分のない章で、仏教的無我観を明示した、いわば付録的な一巻である。総じてこの学派の根本教義は、「我空法有、三世実有、法体恒有」という旗印で示される有部の教学の継承で、きわめて実在論的な立場であり、その哲学的議論はまことに煩雑なものである。

日本仏教では確かに南都六宗の学問宗ではあったが、具体的には一学派として成立してはいたわけではない。道昭（六二九—七一〇）や智通（六五八—六七二）や智達（六五八—）の法相宗の伝来とともに伝えられ、奈良時代では、行基（六七〇—七四九）、玄昉（七一七—七四六）、義淵（七一七—七八）らの『俱舍論』研究によって、とくに東大寺や元興寺、薬師寺などで講学が盛んであった。しかし結局は法相宗の寓宗として展開し、後には各宗にわたって共通の学問（余蘊）となり、江戸中期以降では真言宗の性相学などのように俱舍、唯識あわせて、いわゆる仏教学の一般基本常識として各宗派に広く研究されたのである。

○ 成実宗

インド仏教の論師阿梨跋摩（ハリヴァルマン、二五〇—三五〇）の著わした『成実論』は、一般には、小乗仏教の立場ももたながら説一切有部の教義を批判した論書とされ、大乘仏教の空の思想を踏まえながら、部派小乗の真実義を明かそうとしたもの、くだいていえば大乘仏教への橋渡しの論書とされている。サンスクリット原典やチベット語訳の訳本も現存していないところから、今日の学界では問題の多い書とされている。

この思想内容も、「人法二空」（人間に常一主宰の自我がなく、五蘊の存在も空と控えること）の立場で、有部の「五位七十五法」に対して、「五位八十四法」という一切存在の分析を行ない、これはまさに唯識仏教の説く「五位百法」の法相観への過渡を示唆するものである。『成実論』とは、「真実を完成する論」（仮名・サトウヤ・シッディ・シャーストゥラ）ということで、二十七賢聖といわれる二十七段階の修行の完成によって、「聖中道」の真実の立場が開かれるとしている。

中国仏教へは鳩摩羅什（クマラジヴァ、三四四—四一三）の漢訳によって伝えられ、僧導、僧崇らの門下によって盛んに研鑽された。やがて僧崇の学系からでた慧隆（？—六〇二）の登場によって、『成実論』は江南仏教の中心論書としての位置を確立する。しかしこの『成実論』研究も、三論宗の嘉祥大師吉藏（五四九—六二三）によって、『中論』等の三論と明確に区別され、さらに小乗の論書として排斥されたことから、まったく衰えてしまった。

日本への伝来は、天武天皇の時代に百濟僧道蔵（一七二—）によって成実論注疏がもたれたことに由来するといわれる。一般に『成実論』の研究は奈良時代においては盛んであり、いくつかの註訳書も著わされた。しかしながら、成実宗も南都六宗の一つではあるが、終始三論宗の寓宗として根本論書『成実論』も三論教学の学習とともに学ばれたにすぎないのである。

（原 裕）

『浄土』誌購読希望者をこ紹介下さい。

法然上人讃仰会

念佛ひじり三國志

(元)



一 法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

として覚悟の上だ。ただ、みじめな姿で、頼朝と会いたくはない」

「みじめな姿とおっしゃいますが、中将どののお声は、以前といささかも変わっておりませぬ」

「生仏、声や形ではない。わしの心だ」

「お心……」

「迷っている。乱れている。俗事を断ちきれぬ。このままだと、わしはあくまで虜囚であり、頼朝は勝利者だ。そんな差別の中で会いたくないのだ。だからこそ昨日、

生仏が、三位中将重衡の恩義にむくゆる日は、以外に早くやってきた。

その朝、生仏は使者を得て、八条堀川堂へ呼ばれていた。

近いうちに鎌倉へ出立することになるらしい、と重衡は言った。

「再び戻ってくることはあるまい。それは武人のならない



法皇に出家を願ひ出た」

だが、法皇の返事は「否」であつた。

敗軍の將、重衡の身柄は頼朝の権限内にある。現在の自分としては一指をも染め得ない、というのが後白河法皇の理由だった。

頼朝の意志だけではあるまい。

正式に出家受戒とあれば、然るべき戒師を得なければならなかつた。

比叡山は源家の意をうかがつて汲々としているだろうし、南都が仏敵重衡のために戒師を派遣してくることなど、考えられなかつた。

「生仏、先日そなたは法然の御房の話をしていたな。聞けばお聖人は在野の戒師であつて、五条の舅どのも受戒したそうな」

「さようで」

「お聖人は来て頂けるだろうか」

「あのお方は上下を差別することなく、また正しいことのためなら水火に飛びことも躊躇されませぬ」

「来て頂ける見通しがあれば、院に今日願ひ出てみようと思うが」

前号のあらすじ

俊乗房重源の東大寺の復興と大仏の再建作業は、色々な意味で画期的な企てであつた。康慶、運慶、快慶という新しい鎌倉仏師たちの出現も、ひとつにはこの南都復興事業に由来していたのである。

寿永三年（一一八四）、都大路にあふれる源家の軍勢は規模もきびしくよく統一されていたが、都人にはやはり不穏な感じを与えずにはいかなかった。この頃すでに平家還都を望む気分が巷間にはあつたのである。八坂引導寺の観音堂にあった盲目の琵琶法師生仏は、東山吉水の法然上人の禅室をしばしば訪れて、その念仏の教えに心を寄せていた。もとより時雨沢の心阿弥陀仏や住蓮との交流もあり、身も心も静かな日々を送っていたのである。そしてこの生仏が、先に一の谷で捕われた三位中将重衡と法然上人の対面に一役買うことにもなるが、それは重衡夫妻に受けた旧恩に報いるための盲目聖の精一杯の努力であつた。

そこで二人は願書の内容について相談した。直接の關係はないが、重衡正妻の輔子が年来法然に帰依してきた。間接的な信徒だったという主張もおとるはずである。

願書はその日のうちに提出され、折返し聴許する旨が届いた。

後世の史家の大半は「平家物語」にえがかれた法然による重衡脱戒に疑問の眼差しを投げかけている。「平家物語

語」はフィクションであつて史実ではない。当時の一等資料に、その事実がない、と言うのが否定の論拠である。

また浄土宗の「聖典」とも言うべき四十八巻伝その他の法然諸伝にも重衡説戒に触れたものがない、という点も黙殺の材料となる。

四十八巻伝は、天台僧によつて編まれたものだという。その成立情況は、在野で活動してきた念仏ひじりの集団が、「浄土宗」という合法教団として体制内で発足するための、いわば認証資料として編集された匂いが濃い。宮廷や貴族との親密な接触を、ことさらにうたいあげねばならなかった。

その点三位中将重衡は国事犯であると同時に仏敵、体制仏法の凌辱者でもある。

寿永の戦乱から三、四十年後に出来たとされる「平家物語」が述べたエピソードを逆に黙殺することの方が自然であらう。

また史家の立場から言つてもこの国の国民文学と称せられる「平家物語」が法然念仏思想をPRする唱導文学と認めることは、その学問的プライドが許さないのかも知れぬ。

兼好法師の「徒然草」によれば、「平家物語」の作者は信濃前司行長ということになっている。行長が編んだものを盲目の琵琶師生仏によつて普及化していったのである。

信濃前司行長とは誰か。黒谷以来、法然の身邊に随仕した法蓮房信空の実弟である。生仏もまた「浄土宗」の資料に登場してくる門弟ひじりであることは言うまでもない。

また法然と重衡との関係も、これまでしばしば触れてきたように五条大納言邦綱を通じて太いパイプでつながれているのである。つまり重衡説戒は「事実」として十分に信憑性を持つ条件がそろっている。

それと、これが最も重要な観点であるが、「諸行無常の鐘の音」で始まるこの抒事詩が、もしも上下善惡の差別なく救われるという法然思想を抜きにしたら、文学としてのモチーフを失つてしまうのである。没落美への詠嘆だけに終始する。虚無だけのものが、国民文学として広く大衆層へ喰ひこむはずがない。

当時の一等資料――

と言うが、その殆んどは貴族、僧侶の日記である。そ

こに共通するものは、新しい支配階級である武士すら除外した高樓の密室内におけるやりとりの叙述であつた。中下層階級の問題は取り上げられていない。

「平家物語」を筆頭に「吾妻鏡」や「源平盛衰記」が法然の重衡説戒を大寫しにしていることは、そこに庶民大衆の主張があつた、と看破できぬであらうか。

さて、夕刻が迫っていたが、生仏は東山指して道を急ぐ。何としてでも今日中に法然を八条堀川堂に連れて来たいという使命感に燃えていた。

折から雨脚は激しかった。東山から流出する溪流は増水して真葛ヶ原を浸した。水面は恐ろしい形相をむき出しにしている。ひとつ足を奪われれば濁流の底である。

堀川堂からついできた武士の方がゆき悩んでいる。盲人の足を追い切れぬのである。

ようやく真葛ヶ原を越える。山路になる。吉水の禅房は近かつた。

雨脚を縫って、さわやかな声が響きはじめた。

念仏の声だ。合唱だ。

こんな日である。聴問者はない。禅房の門弟たちは師の法然をかこんで、称名念仏に励んでいるのだつた。

「法然さま」

縁先からかけた生仏の声に、念仏はまだやまなかった。「生仏でございます。お願いの筋があつて、まいりました」

法然自身が、まづ先に気づいた。

念仏中だ。俗事はあとまわし。しばらくそこで待つがよい。

そんな格式張った法然ではない。

「この吹き降りに、ひとりで登って来られたのか」
気さくに驚きの色を示した。

「いや、侍者がおりますが」

屈強な武士は未だ山腹まで登っていないのである。

生仏はもどかしげに重衡の意志をつたえた。

「わかつた。すぐに出かけよう」

法然の腰は軽かつた。

相手が貴人長者であらうと、極悪人であらうと差別はない。

まさしくこの時点、平家の虜囚重衡と面接することはすこぶる危険であつた。在野のひじりとは言え、洛中には坂東武者が満ちあふれていた。悪質な噂が流れれば、

即刻斬り殺されかねないのであった。

叡山黒谷のころから信空ともどもに随仕してきた感西が従うことになった。今夜は東山へ戻れぬであろう。

二

法然は雨中の途次、三位中将の様子を生仏に問いただした。法然にとっても重衡は未知の存在ではない。急患に馳せつける懇篤な医師そのままだった。

「三位中将は、いま幾歳であつたかな」と、法然は訊いた。

「二十七、いや八になられましたか」

「未だ三十前か。その若さで、世人の二倍分も生きたわけだ」

「二倍分とは申しながら、合戦にのみ明け暮れたようなものでございます」

源三位頼政と以仁王の叛乱このかたの数年間、重衡はつねに平家の軍司令官として馳けまわっていたのである。「凛々しいお方でしたが……」

本質は武人ではなく、芸術を愛し、内面の問題に沈湎

する心やさしい人なのだ、と生仏は強調する。

法然は、ただ黙してうなずくばかりであった。

八条堀川堂に着いたとき、もう夜陰も深まっていた。面接は明調にでも、と言う警護側の配慮を、重衡自身がしりぞけた。一刻も早く法然上人にお目にかかりたい、と申し入れた。

囚房は十坪ばかりの小堂宇だった。四囲は雨戸の内側に堅牢な格子がめぐらされてあつた。むろん縁先の各所には武士たちが屯ろしている。

外周の警護は厳重だったが、堂宇内には自由の気が流れていた。燭台も明るく、重衡のかたわらには身辺の面倒をみる女人すらはべっていた。彼女は民部卿入道親範の娘で、重衡が在京時代の愛人だった。警固司令である土肥実平の好意で、この数日間、身辺に随仕することを許されたのであつた。

一ノ谷合戦で虜囚の身となり、重衡は翌年の六月二十三日、木津で斬られるが、この人ほど優遇された虜囚も珍らしい。このあと鎌倉へ下ると、池田宿では長者の娘を与えられ、鎌倉抑留中は有名な千手姫にかしづかれる。千手との恋は有名な話だ。木津で斬られる前には、

＜法然上人の重衡説戒＞



本妻の輔子とも再会する。

役目柄、重衡に会うすべての人間が好感を寄せたようである。

なぜだろうか。

平家の公達――

この言葉は現代に至るまで、どこか複郁とした香気を投げかけてくる。汚がれを知らぬ育ちの良さが、その没落美と鮮かに溶合するからであろうか。

平家の若大将たちほど美しい印象を残した武士はこの国にいない。

しかもその象徴的存在が三位中将重衡であったこともまたまぎれない事実である。

虜囚の身となったこの若大将に、美女をあてがってやりたい。そんな美意識が警固者に共通するのもかも知れない。

法然は重衡と面座した。

三位中将は地獄で慈母にめぐり遇ったように煩悶のすべてを法然に吐露するのである。

「私は平家が榮耀榮華をきわめていたときに育ち、他人の苦勞というものを知りませんでした。成人したあと

は、平家が四国に敵を持ち、合戦に明け暮れたのです。この合戦では多くの人を殺し、それを軍功と信じこみ、その人々の不幸を考えようとしませんでした。これは、人間として悪逆非道の所業でございましょう」

「そのとおりです」

法然是顔色ひとつ動かさずに答える。

「そればかりではない。私は南都を焼き討ちにしました。これは南都を摺伏せよ、と言う父清盛の命であり、また後白河法皇の王命でもあった。戦乱のさなか、兵火に伽藍に及んでしまったのです。しかし、これは弁解にならない。責任者は私自身だったからです。この仏罰を、何とかして償いたいのですが、虜囚の身ではそれもできません」

「なぜ、かなわないのですか」

法然是意外だ、という表情になった。

「出家剃度して、戒を受けそれを守り、仏法修行を励もうとしてもその自由すらありません。私は自分の罪をこの現世では償えないのでしょうか」

「そんなことは、ありません。私自身も武士の子として生まれました。幼年のみぎり、父は殺されました。武士

の子なら、父の仇を討つのが本意でしょう。しかし父は、臨終に仇討ちだけは必ずしてはならない、と遺言しました。私は比叡山へはいりました。子が父の仇を討つ。殺された者の孫が、またその仇を討つ。こうした悪い因縁をくり返す世の中で何とか救われよう仏法に励んだのです。しかし世の中にはあなたのように励みたくてもその時間や自由を持たない人が沢山実在するのです」

「そんな人間は、何をしたら救われるのでしょうか」

「いや、仏門に入って四十有余年。私自身ですら、その時間も自由もなかったことを悟ったのです。今から十年ほど前のことでした。自分で償おうとするから誤りなのです」

「自分で償おうとしてはならない」

「そうなのです。阿弥陀さまというお方は、その償いをすべて一身で背負われることをお誓いになられました」

「阿弥陀さまが……その阿弥陀さまにお願いするために、どうしたら良いのでしょうか」

「自分の名前さえ呼んでくれたら、必ず私どもを阿弥陀さまがいらしやるお浄土へ連れていって下さるし、そこで阿弥陀さまともどもに現世の悪因縁を断つ償いの仲

間入りをさせて下さる、と保証してくれているのです」

「お浄土へ往って償うのですか」

「そうです。だからあなたも、たった今、おのれの力で償いをしようなどと考えないで、何もかも阿弥陀さまにまかせてしまうことです」

「そのためには？」

「阿弥陀さまの御名を称えなさい」

「どうやって……」

「南無阿弥陀仏と称えるのですよ」

「南無阿弥陀仏、ですか。それで、こんな悪虐非道の身が救われるのでしょうか」

「間違いなく救われます」

法然の面上には確固たる色があった。三位中将重衡は、それを見逃さなかった。

この上人の言うことに、間違いはないんだ、と確信できた。

堂外の風雨はいよいよ強くなっていた。その風が燭台の灯を吹き消した。随仕する女性が、灯そうとして立上がりかけた。法然は制した。

「阿弥陀さまの御名を称えるのに、明かりは不要です。」

この生仏をこらんなさい。つねに闇の世界にいます。しかし生仏は、念仏を信じているからこそ、彼が棲む世界はいつも明るいのです。そうであろう。生仏」

「ハイ。いつも明るうございます」

「中将どのも一刻も早くその闇から脱け出るべきです。さあ、みんなで声をそろえてお念仏を称えましょう」

五人の合唱が始まった。

その声は澄んで、力強く、美しくさえあった。

三

夜明けとともに雨も、風もやんだ。輝かしい朝陽が、堀川堂へ差しこんできた。それはあたかも闇路をぬけた三位中将重衡の心のようにであった。

とうとう夜を徹して称念し続けたのであった。

朝餉が運ばれてきた。茶粥であった。

当時の朝餉としては高級品である。

「いつもこんな茶粥を食されるのか」

法然は訊いた。

「いや、此処へまいって初めてです」

重衡は首をかしげた。

「美味ですね」

法然も顔をほころばせる。

「胸のつかえも取れて、ほんとうに美味です」

「米が現生を生きる糧であるとしたら、念仏はこの茶の葉なのですよ」

法然がさらに説法を続けているところへ警固司令の土肥実平がはいってきた。

今朝、鎌倉へ出立する旨をつたえた。

重衡は盲目の生仏をかえりみた。

「そなたのおかげで、私は心残りなく出立できる。お聖人と一夜をゆっくり過ごさせて頂いたからだ。そなたには何と感謝して良いものやら」

「ご恩の万分の一にも、と思っただけでございます」

生仏は、物見えぬ眼を、さぐるように重衡へ向けた。

さわやかな朝であった。

重衡の一行は堀川堂を出てゆく。

いちおうの縛しめはあったが、馬上の三位中将は凛々しかった。

外貌が美形のためだけではない。充実しきった内面

が、この公達に光りを加えていたのであった。

関東へ送られた重衡は伊豆にある北条屋形に留置された。

三月二十八日、鹿狩に来た源頼朝は北条屋形へ立ち寄った。重衡は縛られたまま廊下に坐っていた。そこを通りかかった頼朝が声をかける、という面接の形式を踏んだ。屈辱的な形式であった。

頼朝は言った。

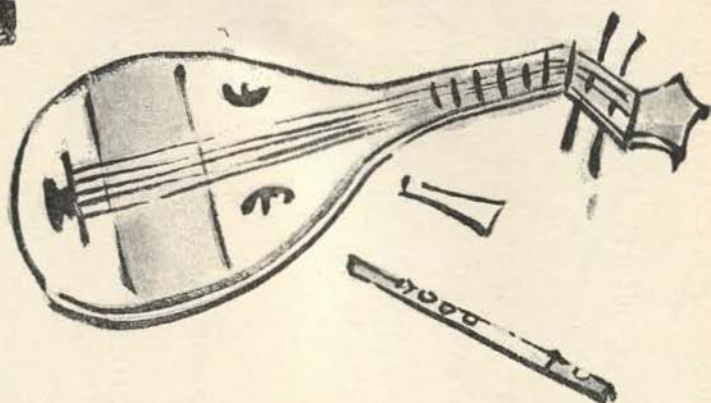
「父義朝が悲運の死に遇ってから二十五年。やっと苦節がみのつて、卿をここに見ることが出来た。卿らが榮耀榮華をきわめていたころ、わしはいつ殺されるか、と不安な毎日を送っていた。天はわしを見捨てず、今こうして逆転した立場で会わせてくれた。卿のみに限らない。屋島の宗盛卿らを、こうして見るのも近い日であろう」

勝利者の奢った眼で、虜囚の公達を見下したのであった。

藍摺（あゆずり）の直垂（ひたたれ）を着し、立烏帽子の重衡はもの静かな眼で頼朝を見返した。

「これはすべて運命のなせるわざであって、私たち人間がとやかく申すことはありません。昨日の勝者が今日

＜琵琶と横笛＞



の敗者となり、また明日の敗北者となろうとも、これは世のならいであって、私は今虜囚の身でいることを少しも恥辱とは思えません」

淡々と語るのである。

未だ三十に手の届かぬ若者の余りにも落着き払った態度に、頼朝は動揺した。

「しかし武士の道徳の第一条は縄目を受ける屈辱であるうが」

「武士の掟なぞは所詮は仮の約束ごとです。人間はもっと正しいものを見つめていなければなりません」

「縄目を受けて、なおそのような大口を叩くのか。卿なぞは今夜にもその首を刳ねられる身なのだぞ」

頼朝は怒り、声を荒げた。

「どうぞこの首をお刳ね下さい。私は恐ろしいとも悲しいとも思いません。人間いつかは死ぬる身ですから」

頼朝は足音を立てて重衡の前を去ったが、心の動揺は消しがたかった。

初めて目にする宿敵平家の公達であった。未だ年若いのに、なぜあのように泰然としていられるのであろうか。関東の山野で育ったおのれの教養の浅さと頼朝はかえ

りみないではおれなかった。嫉妬とともに平家への畏敬の念が湧いてきた。

重衡はそのまま御家人狩野介宗茂の館にお預けの身となる。頼朝は処刑せぬばかりか、宗茂に出来る限りの優遇を命ずる。四月二十日には、虜囚生活を慰さめるための酒宴まで催してやる。

さすがに頼朝自身は列席しなかったが、工藤祐経らが鼓を打って今様を歌う大サービスぶりであった。

「誰か琵琶を弾ずる人は」

と、重衡は問うた。坂東武者にはそんな高邁な趣味がない。

席に待っていた千手姫(千手前)という女房が、いささかたしなむ、と申し出る。重衡は横笛を手にして彼女と合奏する。

さらに美声で千手姫のために朗唱もした。

燈暗うしては数行虞氏が涙

夜深うして四面楚歌の声

項羽と虞美人の愛惜を歌ったものだ。

一座は重衡の芸心に感嘆する。つたえ聞いた頼朝は列席しなかったこと残念がり、千手姫を重衡のために常時随仕させることにした。

二人は深く契り合った。重衡が鎌倉に滞在した一年余りは恋の春秋でもあった。武將と舞姫は、琵琶と横笛という美音の世界でかたく結ばれた。

やがて壇ノ浦で捕虜となった平家宗盛親子が鎌倉へ引かれてきた。

この宗盛に対した頼朝の態度は、重衡と甚だしく異なっていた。平家の総司令にもかかわらず、頼朝は庭を隔てた別棟から、使者をとおして訊問した。じかに言葉をかけようとはしなかった。

縛に就いてからの宗盛の女々しい態度が鎌倉にも聞こえていたのだろう。

宗盛はこの訊問でも釈命と助命をくりかえした。重衡の凛々しさを目撃した頼朝の側近者は顔をしかめるばかりであった。

生来の凛々しさだけではない。重衡の内面には法然によつて導かれた揺るがざるものがあった。

重衡は宗盛父子ともども再び京都へ送還される。吟味

が終つたというわけだ。

ところが宗盛父子はこの途次、別々に殺されてしまふ。重衡だけが帰着した。これも壇ノ浦から帰った正妻の輔子と再会を許される。しかしこの直後、南都の衆徒に身柄を渡されて処刑されたのである。

頼朝としてはあくまでも重衡に戦争責任を背負わせることなく、仏法の凌辱者として南都にゆだねたわけである。

鎌倉で結ばれた千手姫は、重衡の死を聞くやただちに出家して信濃の善光寺にこもった。愛人の菩提を弔らうて余生を献げるつもりだったが、しかもなお追慕の情やみがたく、四年後に自殺して果てる。二十四歳であつたという。

「平家物語」は三位中将重衡の晩年に、かくも多くの文章を費やしている。

若くして揺るがざる心で苦難に立ち向う姿を描出する。そこには自力で悟達した聖者はなく、法然の教えを露疑わず信じきった他力者の、ナイーブで平静ななかに最後の時間を生き抜く新しい精神像をわれわれは確認できるのである。

こうした新しい精神像を除外したとき、「平家物語」の価値は半減してゆくことであらう。

ところで生仏が、壇ノ浦から帰洛した重衡夫人と再会したのは、重衡が木津で斬られたあと幾ばくもない文治元年秋のことであつた。

日野のあたりに隠棲していると風の便りで聞いたが、使者が案内した先は大原であつた。

久方ぶりで琵琶を聞かせて欲しい、と言うのが招きの主旨であつた。

盲人の琵琶師。

この薄幸な身が逆に幾つかのだいじな歴史上の場面に生仏を立たせるのである。

大原の寂光院。

そこにいたのは重衡夫人だけではなかった。壇ノ浦沖で幼帝安徳天皇と別れ別れになつて生き残つた中宮建礼門院も尼僧姿で世を忍んでいた。

水没しかかる寸前を、義経軍兵士のさし出す網で掬い上げられたのは、重衡夫人も同じであつた。

ひとわたり琵琶を奏し終えたあと、重衡夫人は何やら今様でも歌うような調子で語り出した。

(つづく)

二 編集後記 二

○軒下の風鈴をしまう頃になって、涼風の訪れとともに、庭先の草むらからは秋の虫たちのさやかな合奏がはじまった。——秋の夜長を鳴きとおす。ああ面白い虫の声——などと唱った過ぎ来し方、幼い日々が懐かしい。暑かった夏の激しい日ざかりの中で、いちずに動きまわった私たちの心は、今、秋風にまかせて穏かな安らぎを得ている。実に、このひと時の平安が大切である。虫のすだく声に眠られぬ夜を送るのもよい。心静かな休息は、まさに明日の希望へ向けての大きい活力となるからである。

桐の葉のかさなる影も秋気かな 流螢
金の芒はるかなる母の褥りをり 波郷
○さて本誌の持集記事「現代とこのころのシリーズ」も、各界でご活躍の皆様のご協力を得て、それぞれの立場から、まさに「このころ」の問題について意義多い文章を頂戴してきた。一応『浄土』誌十一月号をもつ

て、十回に渡って考えてきた企画を閉じようと思っているが、それに先立って読者諸賢からのご意見やご感想を承りたいと考えている。現代人のもつ複雑な思惑や、様々な心の様相。私たち一個の人間には測り知れないこの人間たちの心の動きをのり越えて、お互いに手を取り合って生きるこの大切さ、そしてそのむずかしさ。この複雑多岐なる人間世界の現実では、「和を以て貴しと為す」というような名言の標榜は、可能なのか。どうか読者の皆様の忌憚のない提言や寸評をお寄せいただければ幸いである。この欄の締めくくりとして、皆様のお考えで、「このころ」の問題をめぐって綴ってみたいのである。

○九月はまたお彼岸の季節。実り多い秋の収穫を前に、六波羅蜜の精進で一週間を過したい。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧——そして、これらの六つの徳目も、浄土宗では念仏の一行に集約されて、おのずから実践されるものであろう。

「浄土」購読規定

会費一カ年金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 九月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十一年八月二十五日 印刷
昭和五十一年九月一日 発行

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒二〇三 振替東京八一八二一八七番

「浄土」教化トラクト

『ひがん会』 秋季号

B 6 判・表紙共 8 ページ、定価 20 円 (200 部以上 19 円)

- ◎ 檀信徒の皆様へのご施本用にごぞ広くご利用下さいませ。
なるべくお早目にお申し込み下さい。ご便宜はできるだけお
はかり致します。

発行 法然上人鑽仰会

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

＝新刊＝

大正大学教授 安居香山 著

『予言と革命 —ここにも大変革の危機がある—』

B 6 判 250 頁 定価 850 円

- ◎ 予言の書「緯書」の研究者である著者が、自然的破滅でなく
人間自身による日本滅亡の危機のあることを、中国・日本の
歴史を辿りながら、予言や易の流行する現代社会に訴えた問
題の書!!

——目次——

○ここにも大変革の予言がある○予言できめられた日本の紀元
○世直しの改元と予言○予言にゆらいだ日本の歴史○予言で亡
んだ始皇帝○中国の歴史を左右した予言革命○予言はどうして
歴史を動かすか○予言革命の温床○現代でも予言革命はおこる

〒605 京都市東山区清閑寺山内46-5

発売元 探求社

中住ビル 3F

(振替) 京都 21185